

史学研究會春季大会

歴史・地理教育の諸問題

講演及び討論會報告

中学校の歴史教育に於ける問題点

梅田 勇(松原中)

一、歴史科独立の問題

(1) 社会科教育の批判

戦後新しくスタートした社会科は現在の生活経験から出発する所謂問題学習が、徹し批判の前に立たされてきている。生徒果して社会を改良するような積極的な日本人をつくり得るかどうか、教育内容が表面的な連関だけで雑然と集められている事、生徒の自発活動が強調されながら現実には、方向のない「ごっこ遊び」や

調査のまねごとにおわつているのでないか。特に社会に対する歴史的な認識が欠けている事は大きな欠陥である。

(2) 歴史科独立の必要

社会科の歴史教材は交通・産業・文化と個々ばらばらに配置されている。この様な便宜的な機能主義によつては社会の歴史發展を理解する事は出来ない。特に日本民族の發展を明確にとらえ祖國への正しい愛情を育てる為には、小学校に於ける体系的な日本史の学習、現在選択制となつている高校日本史を必修にすべきである。

二、新しい歴史教育は何を目ざすべきか

現場の教師は「歴史教育は戦時中は軍國

主義によつてゆがめられ戦後は民主主義のお先導をかついだ様な気がする」とその不安をもちしているが、これは現在の日本が当面している民族的な危機を表明しているものと云えよう。新しい歴史教育のねらいは何よりも日本民族という具体的な基盤に立つてあくまで社会の眞実を求めると正しい歴史的な思考力を養うものでなければならぬ。民族の危機をのり切り日本人の生活を高める為になにもをもおそれぬ情熱と力を持つ人間が目ざされねばならない。

三、歴史教育の方法について

現在の日本史教育に於ける時間不足は急速に改善する必要がある。つめこみ式になり易い学習形態は改める必要がある。平板な年代記的な取扱いをさげ歴史の發展過程を生きて生かすべきである。そして何よりも歴史的思考力を養うことに重点がおかれなければならない。史実を教えこむのではなくして、具体的な歴史事實を通して生徒自ら考えさせるものでなくてはならない。その為には、これまでおろそかであつた史料をもつと親切な形で具体的に考えられな

くはならない。その意味で郷土史は最も重要である。また生徒の歴史意識がどのようであるかについて絶えず調査が必要である。教科書もまだまだ改善の必要がある。

難解な記述、子供だからというので安易な類推をのべてかえつて迷わせるような記述は敢にいましむべきである。生徒の心をひきつけて止まないすつきりした歴史叙述が望ましい。

四、歴史教育者の態度

歴史教育は現在の日本が当面している切実な問題をはつきり知りこれを正しく批判し社会改造の情熱を高めるものである。いわば民主化の課題を背負う新教育の重要な支柱である。然るに現場の教師にはとかくためらう傾向が見える。例えば平和の問題や現代の政治の動きについてはつきり言えないという現状はまさに直実を旨とする歴史教育の危機である。今こそ平和と愛国の信念を強め、ゆるぎのない科学的精神を貫かねばならない。此の点で歴史学と歴史教育はその本質を同じうするものである。

日本史教育の

歴史と現状

大石良村（鴨沂高）

明治以来の旧制度下の日本史教育は、団体を明かにし国民の志操を養うことを目的としたが、六三制度では日本の民族、文化の発達、發展を明かにすることが眼目となつた。そして教育方法もつめ込み主義から考えさせよという方向に變つた。

生徒は現実に対する考え方、さらにそれを分析しようという意欲が強くなり、議論はうまくなつたが、基礎教育に欠ける傾向が強

い。而も教師は単に事実を述べ、事実と事実との間に価値判断をさしはさまない、いわゆる実証主義の立場にあつて教えていることが多

い。つまり、教師の立場を過去の教育で培われた良識の限界内にゆだねているのである。こうした欠陥を救うには、(一)戦時中のものをそのまま使つていたり、或は教材の致命的な不足を強力に補充し、(二)優良な歴史担当教員を早急に養成すべきだと思ふ。

世界史教育の盲点

山本 実（洛北高）

世界史教育に関する当面の問題を提示してほしいとの司会者側よりの希望があつたので現在高校において實際指導に在る者の一人として、平素より解決を望んでいる二、三の問題を提出し、亭間学者、實際家諸氏の御教示を得たいと存じます。

私は先ず、世界史という教科は現代文化の歴史的背景や現代社会の發展の過程を通じて、現代の社会、政治、経済上の諸問題を解決するに必要な能力を養うために設けられたものであるということを、——これには異論があるとしても——承認した上で、即ち社会科学界史とは教育的要請によつて設けられたもので、あくまでも現代を立脚点として世界史を成立せしめているものであるということを、前提として、話を進めたいと存じます。

(一) 世界史学の確立

さて問題の第一は世界史成立の理論的根拠が、一致しないが故に、教育上の取扱に關して混迷状態を生んでいるということでありま

す。東大史学を中心とする尾崎瀧彦編の「世界史の可能性」や京大西洋史の井上智勇著「世界の理念」には、夫々専門的立場を代表する人々の相異なるすぐれた意見が述べられているが、理論構成に卓見であつても、實際教育についての検討を遂げたものとは申せないのであります。右の著書が出されてから早くも四年近くになりますが、世界史教育の事情は依然として混沌の状態におかれています。この根本的理由は要するに日本人として世界史の叙述が困難であることや、世界史の成立の理論的立場が異つていること、即ち世界史の成立が至難なる点にあると信じます。

世界史学の成立が可能であれば、学習指導要領の作成や、時間の配分や、大学入学試験問題の件も多少とも改善され、学問と教育の關係は一層明確な立場をとりうると思われまゝです。故に今日の世界史教育の盲点を解決するものは、速かに世界史学を確立することにあるといえましよう。ではどのような理論が教育を混乱せしめたのであるか。

一体世界史の教科を成立せしめる理論的立場には、次のものが考えられております。

第一は世界の凡ゆる地方の歴史を体系なしに、文字通り羅列的に取扱うものである。云々までもなく、こうした取扱は地域別の歴史教育と根本において何筆異なるところがなく、従来の日本史、東洋史、西洋史という分科的取扱の再現に他ならないといえましよう。

第二は世界の歴史を社会の發展段階に即応して捉えるという立場であつて、いわゆる社会發展段階説に立つものであります。この立場は理念的にも、理論的にもすぐれたものといわれながら、具体的な取扱が至難であることが欠点といえましよう。例えばヨーロッパや日本など、既にそれ自身の歴史的説明を経て、概観的にはその發展段階が明示されておるものについては可能としても、東アジア、西アジア、インドの如く確なる説明がなしえないような地域はどのように取扱われるのであろうか。生産手段の変化による社会の變革の共通性は抽象的には云いえても、具体的事例を挙げることは困難であるといわねばならないでしよう。

第三は民族と民族との關連を通じ、形成されゆく歴史の中から作られてゆく世界史、文化の交流や伝播を通じ、文化的世界圏が形成されてゆくという立場、これは文化交渉説といわれるものであるが、この見解は世界が一體化された時に、始めて世界史の成立が可能であるということになりましよう。それ以前は一体どのような世界史が成立するのであろうか。

これを要するに世界史教育の混沌を醸し出している根本原因は、世界史成立の理論形成に、相異なる二つの有力な見解(第二と第三の)が存している点にあると言えましよう。この盲点を打開せぬ限り、世界史教育の前進は覺つかなく、むしろ外国史という教科に姿を變えるのがよくはなからうかと考えます。

(二) 大学入試問題

問題の第二は大学の入学試験問題の作成に充分の考慮を払つていただきたいことであります。私は一般的にいって学力とは、単に知識、理解力をさすのみでなく、思考力、判断力、創造力、実践力といった、将来の社会に適応しうる力を意味していると思ひます。高校における世界史の教育も、そういう観点から取扱われているというところを理解してい

ただきたいと思ひます。大学によつては社会科学の目標を達成するにふさわしい問題も出されておりますが、單なる暗記力を見るような知識だけの問題が出されているところも、ないとはいへません。大学側においても基礎的な知識だけの出題にとどまらず、明日の社会の人間形成に役立つような問題をも考慮していただきたいと思ひます。些細な特殊な問題が作成されるようになると、尤も大切な世界史の主流や人間形成の面が見失われて、恐らくは特殊史の羅列的世界史教育が再現されるのではないかと憂慮されるからであります。

(特に中心になつた点のみ記載しました)

郷土誌教育管見

芦田 完(福知山高)

(一) 郷土の意義出生地・成育地・居住地・直観範圍等諸説があるが、私は石山教授の「郷土とはそこに生れ又はそこに移つて少の時期を過し、その土地の自然及び人文を全体的に体験したところ、又は体験し得

歴史・地理教育の諸問題

べきところ」という意味に於いての生活區域説を採りたい。

A(二) 郷土教育の目的

地理・歴史(社会・風俗習慣伝承等を含む)教育の郷土化ともいふべき立場

1 教科書などに出てくる術語・又・は何々の教材事項を理解させるために郷土の教材を利用する。

2 地域性把握(地理)又は社会の発達文化の変遷の科学的理解(歴史)のため、郷土の事象を以つてその実習の場たらしめる。

註 地域性の認識・地理的觀念の養成のための私案を擬出した。地理学の理論についての所説が生れるとも、研究方法が如何に進歩して来ても、結局この学問の生命、特色とするところは、小生のさす地人・人地・地地・人人の各要素の密閉的事象を歴史的文化発達の諸段階に於いて科学的に認識することであると思う。

(自然が人間に可能性を供給する意味も含めて)

B 郷土誌教育を以つて一つの教育主義とする立場

1 児童生徒の生活体験を組織だててやり、彼等をして自然的・社会的・歴史的環境について科学的に理解する力を養成する。…科学的思考の陶冶：平凡だと思つている事柄に深い意義を発見させ、広い立場からその文化的意義を見出させる。

2 郷土そのものを認識せしめようとする立場であつて、それにより一面郷土の発展に資せしめる(よき郷土人↓よき日本人↓よき世界人)と共に、他面環境に対する適応性を培い將來の本人の生活発展のために役立たせる。

(三)

私の郷土誌教育の一端

1 教材との対比：…段丘・泉・洪水・養蚕・城下町・水車・集落等々(無限)の諸關係

2 地域性把握のため各要素の分析資料作成蒐集中

3 地域内の考古学的・歴史的・地理的・民俗的・経済的・行政的方面の特殊の研究は個人の自由研究として課し、又生徒会の社会クラブ員の研究討議にまつ。

……(福高祭の展覧会で発表)

4 例えは社会科地理としての交通單元の一部としては、古来山陰道の変遷や阪鶴・鉄道・京都鉄道の建設史等を取り扱うなどとして、これに伴う歴史・地理・経済・政治等多くの考え方を養わせる。

5 ローカルなものと考えているものも、他に類例があることを知らせて、典型的に把握させる。逆に平凡なものと考えているものが、深い重要な意義をもっていることを知らせる。

6 郷土人個々の偏見・誤れる伝承の是正、しかし伝承そのものの真偽は別として、それが永く伝えられて来たことが事実であり、それが又現代年中行事などに實際行われているとせば、社会科としては無視出来ない。――大江山伝説・磨呂子親王伝説・船形山伝説・小野小町伝説等。
7 郷土と日本又は世界とのつながりについて認識させ、偏狭な愛郷心に陥らせないこと。

註 拙著「高二地理実証研究」及び「海外発展教育の要諦」参照

8 世界の文化の流れの郷土への浸透・融合、止揚……伝統の不滅性と農民生活。(福知山踊)

(四) 郷土誌教育振興策

1 地域社会に対し、この方面への関心を深めるよう努力させる。福知山史談会、福知山文化協会、城址やデパートなどでの史料展、实地踏査・地理的歴史的に意義あるエキスカージョン。

2 小・中・高校・大学の縦の協同連絡を密にする。研究会や郷土誌資料の交換など肝要である。

3 要はその土地の社会科の教師が、献身的に實際研究にあたって他を感化することにある。以上。

歴史教育論

井上智勇(京大)

歴史教育とはそもそもどのようなことであるか、歴史教育と歴史研究とはどのような関係に立つのか、この二つの問題について私見を述べる。

歴史研究ないし歴史学は、エドワード・マイヤーが「歴史学とは、現実の世界に生じた客観的事実を叙述する字句である」といつているように、過去の客観的事実をその考究の対象とする。過去の客観性なしには歴史学は成立しない。歴史叙述が歴史的ロマンと區別されるのは、後者が主観的恣意的構成を許すのに対して、前者があくまで過去の客観性に依存するところにある。このような過去への依存性を歴史学の過去性とよぼう。ところで過去を認識し叙述するのは現在のわれわれである。デイルタイは歴史認識の可能性を現在の体験の過去への投射に求め、トレルチは歴史学的体系を現在の文化総合に求めた。歴史学は現在なしには成立しない。だから事実としての歴史は過去から現在へと發展し来るが、歴史学は現在の体験から始まるといえる。歴史学は要するに過去と現在との結合の上に成立する。

教育は Childs and others, Social foundation of education によれば、常に時と場所と環境とを反映する。一定の時代・一定の民族の恐怖・希望・理想を、その理論と実践

の中にあらわす、という。もし教育がこのように歴史的現実の中から、未来を切り開こうとするものであるならば、教育は現在と未来との総合において成立するといえよう。

歴史学がすぐれて現在から過去へ眼を向けられているとすれば、教育は常に現在から未来へ向つてゐる。一応こういふことがいえるるとすれば、歴史教育は「歴史＋鑑賞」＋「鑑賞＋渉考」＝「歴史＋鑑賞＋渉考」の方式であらわし得る。

さて歴史教育が単に「歴史を教育する」としてなく、「歴史を教えること」によつて未来の「人間を育成する」ことであるならば、ここに重大な問題が生まれる。それは教育者自身が如何なる未来像を抱くかによつて、被教育者の未来に大きな影響を与えるからである。影響なき教育は教育ではない。それだけに教育者は自分の抱く未来像に対して常に鋭い批判を加えねばならない。それは歴史的客観性に耐えるかどうかの批判でなければならぬ。その意味で、歴史学の要求する客観主義が歴史教育の場合にも強く生かされるべきことが要求される。深い歴史的認識なしには教

育はあり得ない。殊に世界が危機に直面している現在においては教育者は主観的熱情をおさえて、客観的批判的態度を持つるとともに、未来に生きる青少年にこの態度を植えつけ、未だ来たらざる将来において如何なる歴史に直面しても、正しく現実を把握し、それにもとずいて行動し得る力を蓄積せしめることが、現下歴史教育の使命ではないだろうか。

日本史部会討論

日本史教育の部会には、まず小葉田滋教授の挨拶があり、ついで議長林屋辰三郎講師より、梅田氏報告の要約が行われ、直ちに討論に入つた。討論は

①社会科学教育よりの日本史教育の独立の問題から始められた。

現在の社会科学習が問題解決学習であるところに最大の難点があるがこれは誤りである。しかし、日本史のみを独立させると社会科学新教育の方針と矛盾し、現制度の下では技術的に困難である。これをどう処理すべき

かと、まず発言された。だが、日本史教育の原理は、技術面より、本質的な視点——国土への愛情、民族独立の観点に確かに立つていなければならぬとする日本史の教育原理の確立の問題が強く打ち出され討論は終始この視點に貫かれて力強いものであつた。しかし、これは単に日本史教育の教師のみで実現できることではなく、凡ゆる領域の教師との共同による政治問題とも絡みあわせて解決を求められることであり、その基本線を打ちだすものとして次に

②歴史的思考の養成

の問題に期せずして移つていつた。現在の教科書は叙述せられる問題の間に関連性がなく、したがつて切実な現実の問題解決に役立つ歴史的思考力が養われない。この発言について発表者である椎田氏から、生徒への実際の史料の示し方を、実例によつて補足された。この場合、史料の示した方が客観的なものでなければならぬことは、いうまでもないが、それは生徒の素直なヒューマニティの光にそのまま照らされなければならぬ。このヒューマニティは、案外、子供じしんの

心の中に蓄積に伸ばしていることがある実例も示された。

④ 歴史的思考について、大学或は研究機関への要望

②で討論された歴史的思考を具体的に進めるには、現場の教師が、その切実な問題を研究機関に廻すと同時に、研究機関関係者も現場に出て、その問題を研究の道にのぼす必要がある。日本民族の危機より生ずるこうした切実な問題について最後にわざわざ東京から来場された高橋碩一氏から、そうした動きが、既に実践され、日本史教育の一層の発展に資しつつあることが紹介され、日本史教育の部の討論は、時間不足乍ら、終始充実した討論の中に終えられた。(門廳)

世界史部会討論

世界史部会は戦後新たに高校に設けられた一分科として、主として世界史成立の可能性に就いての理論的問題に議論が集中しように思う。先ず司会者井上智勇氏より世界史は如何にあるべきかの提案がなされ、山本実氏(洛北高)谷川道雄氏(洛北高)宮崎市定氏

(京大)山崎宏氏(日本歴史学協会)川口博氏(洛北高那波利貞氏(京大)の順次に発言及び質疑応答がなされた。今編集者側においてその要約を示せば一応東西交渉史の世界史に對して發展段階的世界史をいかにマッチさせて行くかに論点があつたように思う。併して結局、吾々から見れば結論にまだ今後に残された感が深く、注目すべき議論としては宮崎市定氏の提案に懸る東西文化交流史としての世界史成立の可能性——即ち發展段階的世界史も發展とは民族が一つ一つの問題を解決して行つた過程であり、その解決のためには先進諸国の文明の摂取が不可欠である。そしてその意味では世界史に關する二つの見方も一致するという見解と、これに對して川口氏が發言した形式的な東西交渉史の世界史、發展段階的世界史の区別の拒否——即ち宮崎氏の所謂問題の解決としては両者は一であり、發展段階説にいう法則性とはただ単に他国文明の摂取、イミテーションをいうのではないとの發言は略々、對極的な見解として議論の發展を予想されたが、問題点は他方に逸れて核心を失い、理論的問題に關しては低調を極め

た。その他現行教科書に對する批判としては教材を増加して欲しいという地方高校の声と時間数の關係上教材の整理を要望する市内高校の声とがこれまた對極的な提案として出されたが、参考書、教材に不便な地方の要望を都会地高校の所謂教材の整理といかに案配して行くかはこれまた今後に残された教科書編集者の責任である。尙歴史家の態度についても討論されたが殘数の關係上これは割愛する。

最初の試みとして、盛會裡に終え得たことを先ず欣快としなければならぬが、ともかくも以上の如く問題は單なる提起に留まり、今後回を重ねることにより研究者側と現場と的一致が、理論と実践の一致が達成されて行くかんことを願う次第である。しかし高校側を初めとしてかかる討議の場を持ち得たことを意義深く反省回顧する動向が生じたことを聞くにつけても、かかる試みの傳統と發展を望まざるを得ないのである。(越智)

人文地理部会討論

小学から高校まで地理学的な内容が多く、

教授内容に繰返しのあるものがある一方、全課程を通じて脱落する事柄もある。必須的に行うべき事柄を系統的に決定する必要がある。

この場合地理教育の問題が地理学にあるか、社会的人間の陶冶にあるか、これによつて単元教育の是非の判断が異なるが、概して、小・中学では単元教育、高校では教材本位がよい。しかし高校で直ちに撰択制をとるのは生徒に無理である。高校で地理をやらなると、大学生にして小学校程度の地理智識しかない者が生ずる。これは高校の大教科主義に原因があるのではあるまいか。大教科主義を廢して、各学科毎に徹底的に行うことによつて、大学教育との連絡をスムーズにするこゝとが出来る。

一方、全学科の有機的な関係を考慮しないと、地理を知らずに人文地理をやるような場合が生れる。地理教育と歴史教育とを如何に關係づけるか、これも重要な問題である。

現在の教科書の欠点は、地誌の内容がすくなく、生徒に地名への親しみがわからないことである。個々の地理的智識が、具体的な地

域の中で全体的に括合されることがないために、郷土や国土への愛情も生じない。我々はこの地誌を何処で取り入れるべきか、中学時代は記憶力が盛んであるから、この時代に機械的なことを教授したらよいのではあるまいか。朱雀六校では全国の小学校の写真アルバムの交換等を行つて、目ざましい成績をあげているが、外国教科書のように低学年では色彩図や写真による教育を採用する必要がある。アメリカでは中学でも地理がある。日本でも明治初年には「地球儀問答」等の教科書があつた。社会科学教育の最初に地図及び郷土教育を行うのも一法であらう。

現在の世界情勢に直結する意味で政治地理的な事柄を取り入れ、地誌的な智識に生命を吹きこむことも忘れてはならない。(水津)

綜合部会討論

綜合部会は、各部会討論後、司会者田村実造氏(京大)の提案により、まず各部会の討論についての報告からはじめられた。討論は主として、(1)社会科学教育に関する技術的な問題、(2)歴史教育の内容、(3)さらに歴

史教育者自身の当面する現実的な問題、について行われた。

(1)について、池田氏(市教委)から中学における地理科独立の問題が出されたが、これは現在の社会科学の制度全般に關するものであり、高橋磯一氏(歴教協)から、歴史学協会において、歴史教育を社会科学から独立させるかどうかが討議され、また紀元節復活問題について、それは国民の意志と科学的研究によつて決定されるべきことが結論され文相に申入れを行つた事が報告された。つづいて山上氏(伏見高)から社会科学における時事問題は現代史に解消してもよいのではないかとの発言があつたが、これに対して阿部氏(神戸大)の報告に加えて、小学校における歴史教育の重要性を指摘し、フランスの歴史教育の例をひきつづ、世界史に國際的内容を打ち出す必要をのべられた。これに対して梅田氏(松原中)から中学における歴史教育の立場について発言があり、日本史教育拡充の必要(時

間的に)が述べられ、井上氏(京大)から歴史教育の独立、小・中・高校における歴史教育の関連及び現在の歴史教育の欠陥は何かを具体的にする必要が望まれたが、とくに森田氏(洛陽中)から各単元に一貫性が欠けられているのは妥当でないことが述べられ、更に單元の改正が屢々行われるが、これは如何に行われるのかとの疑問が出された。

(3)東氏(三島野高)は、歴史教育の欠陥或は制度の問題とともに、いま平和・愛国などの問題を取り上げた教育者が、政治的社会的な圧迫を加えられる現状に対する教師の身分保証が重要な問題であることと、正しい歴史教育を抑圧する者は誰かを見定める必要があるとの発言があつた。さらに池田氏(京大)から、現在の日本の危機に直面して、教育者は自信をもつて歴史教育を進めることができなくなつて来ている。それを克服するために、単に問題を技術的な事柄に終らすことなく、従来の歴史教育の在り方を徹底的に反省し、そこから国民のための新しい歴史教育を創造してゆかなければならぬことが強調された。以上のように歴史・地理教育について多く

の問題が出されたにもかかわらず、参会者の討論のなかから一致した結論にまで達することが出来なかつたのは残念であつたが、実際に歴史教育に従事する人と研究者との間に、現在の歴史教育というものを課題としてこのような会合がもたれ、實際問題の解決のきつかけが与えられた事は意義深いものがあつたと思う。(池田)

執筆者紹介

- | | |
|--------|----------|
| 岸 俊男氏 | 奈良女子大助教授 |
| 喜多村俊男氏 | 岡山大助教授 |
| 永島福太郎氏 | 奈良高校教諭 |
| 佐藤圭四郎氏 | 京大文学部助手 |
| 門脇禎二氏 | 立命大講師 |
| 星井彦七郎氏 | 京大文学部助手 |
| 浅香 正氏 | 京大大学院学生 |
| 藤沢長治氏 | 京大特別研究生 |

史林 前号目次(三五卷一号)

- | | |
|---|-----------|
| フランス革命と人権宣言 | 前川貞次郎 |
| 老荘の自由思想 | 村上嘉実 |
| 明治教育史の思想的背景 | 大石良材 |
| 【書評】「真宗源流史論」(中沢見明著) | 赤松俊秀 |
| 「文化史学の理論と方法」(石田一良著) | 中村二柄、Rami |
| Social Systems: C. P. Lonnis | 木地 |
| 節郎、Karl Marx und die Deutsche Revolution 1848: H. Meyer | 岡部健彦 |

京都大学文学部研究紀要 第一

- | | |
|--------------------------|---------|
| 唐天宝時代の河西道边防軍に関する
経済史料 | 教授 那波利貞 |
| 学童の生活時間に関する調査 | 助教 園原太郎 |
| | 外 教室員 |